

教 仁 名 聞

第 160 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 1 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

謙 下 の 道 佐々木蓮磨

ろしいものは、人からほめられたり、また人氣がよくなったりすることでありましよう。この点はみずから深く誠むべきであります。(了)

かつて京都西大路の光円寺というお寺に一人の娘さんがおりましたが、あるとき香樹院さまの御給仕をしておったところ、その娘の気が高いのに気づかれたので「おまえは気が高い、仏に仕えるものは気が低くならねばならぬ」と誠められたので、娘は非常に慚愧し、断然家を出て、草津のある宿屋へ女中奉公に行き、ひたすら謙下の道に精進されたということであります。

私は、この話を聞いたとき目頭が熱くなりました。

また、大和の丘誓堅師は、常に香樹院の薫陶をうけ、聞法に心を寄せておられた方ですが、寺におっては、いつしか説き手になり、教え手になって、謙虚に法を聞くことができないのを苦にし、みずからわざと過失をあらわして門信徒の排斥

を受け、遂に寺を出て、坊主においては、本当に法を聞くことができないというので、あざ名を八兵衛と改め、終生、香樹院について聞法されたと聞いております。こんな話は、現代の民主主義を叫び、人権を主張している時代には、全く通用せぬ話のようにも思われませんが、また現代を救う道も、この謙下以外にはないようにも考えられます。

現代は教育にしろ、宗教にしろ、すべてが人間を偉くする道になっております。しかし偉くなることは、やがて頭が高くなって、対立闘争の原因を作ることになるでしょう。ここに現代文化の大きな盲点があります。

一蓮院師は、常随の同行信次郎に向って、「信次郎よ、私もお前も聴聞の手が上がるらぬのう、聴

聞の手が上がるというのは、気が低くなって頭が下がることじゃ、いつも教え手や導き手にならず、聞き手になり、教えられ手になることじゃ。お互いに今から幾年生き長らえるか分からぬが、いつまでも聞かぬ昔の素人になって、いつも初めのように教えを聞こうではないか、仏法者の道は謙敬聞奉行(謙敬して聞きて奉行す)以外にはないということを常に心に刻みつけておきたいことだ」と申されたそうですが、まことに、ありがたいお誠めであると思えます。

仏法者にとって、最も恐

【念佛寺刊行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念仏語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『佛に遇うまで』
- (六) 『近代教学と伝統宗学の接点』
- (七) 『第十八願を読む』

謹 賀 新 年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

令和六年元旦

土井紀明 中川政二
土井眞由実 吉田徳子
足立美明 中村泰司

対話編

『浄土真宗』

6

B 「人間のいのちには物質面と意識面とがあるのですね」

A 「ええ。いわゆる体と心です。心の無い体は生きて体ではなく、体のない心は実在できません。人間以外の有情も同じですね」

B 「人間のいのちの物質面とは」

A 「人間は物質面でいえば人としての身体ですね。いつでも今ここに物質としての身体として存在している、ということですよ。私たちが人間の体として生まれたことに對しては自由はありません、受け取るしかない事実であり、ここに大きな限界があります」

B 「人間の身体は私の決定によってではなく、すでに決定されている事実なので、生きたときから決定されていることなのですね」

A 「ですから人間はいつで

も今ここに一個の物として存在しているほかはありません。これはまったく与えられていないことであり、刻々に与えられつつあること

であり、どうすることも出来ません。しかしそれゆえに私の計らいを超えていつでも今ここに生かされているという大いなる恵みでもあります」

B 「今ここに一つの物として生きているという事実は私の思いをこえ、計らいをこえて与えられているのですね。それがなぜ恵みなのですか」

A 「今ここに一個の物質的身体として刻々として生きている事実は私の思いを超えて、量りなきいのちの働きがここに働いているその働きの現れであり、私の善悪の行いや都合の良し悪し以前の、そのつど与えられ、生かされているのです」

B 「そうすると私のいのち

は量りないいのちを離れて存在しえないのですね。私のいのちはアミダ仏のいのちのものということですね」

A 「そうですね。ですから、私の存在全体はアミダ仏にすでに受け取られているということですよ。これが、一個の物質的身体としての生きていく私たちの根本的な事実です。これは極めて単純な、日常の事実でもあります。そこにおいて初めて

人間の営みが出来るのです。善悪の行動も始まるのです。良し悪しが出てき、喜怒哀楽があるのです。それらもみな、一個の人間の身として生きていく基本的な事実の上で起こることです」

B 「ということは人間の煩い悩みすら、この事実の上のことですから、煩い悩みによつて、この事実を離れることも、上上がることも、下に下がることもできないし、そういうことを全

くする必要もない。そこは人間の煩い悩みも届かないところなのですね」

A 「ええ、そうですね。ここは喜怒哀楽から独立している有り難い事実です。このことを哲学者である西田幾多郎博士は次のような歌でよみました。

わが心 深き底あり 喜も憂の波も とどかじと思ふ

こういう底に気がつくこと、それが救いであり、仕合せの元であり、ものごとを見る基礎であり、充実した生の源であり、生きがいにもなるのです」

B 「そういう、底に働いて下さっているはたらきが量りないいのちの働き、アミダ仏のはたらきなのですね」

A 「ええそうですね。そのアミダ仏が私たちをいつでも今ここで摂め取って捨てないはたらきとして働いている真実を親鸞聖人は「摂取不捨の真理」と仰せられているのでしよう。この真理に気づく事を信心とか覚りとかいうのです。これに気づくことはだれでも可能な

のです。ただ、そこに心が向かず、この世の良し悪し、優劣、損得、善悪、競争に目が奪われ、とらわれて、今ここに働いている足下の真実になかなか気づかないのです。それを真実の方から知らせようと言葉となつて働きかけて下さる、そういう言葉が南無阿彌陀仏なのです。ですからナムアミダブツをよく称え、よく聞くことが大事なのです」

B 「では人間の意識面、いわば心があるということはどういうことですか」

A 「心のはたらきは広いですが、基本は「知る」というはたらきです。それによつて感じたり考えたり選んだりするのはたらきです。そして心のはたらきの根本的な意義は、こういうアミダ仏と離れていない「摂取不捨の真理」に目覚め、それの上で考えて判断し、表現し、選ぶという、いわばそのつどアミダ仏の恵み（願い）にそつて行動するようにならねばならないということでしょう。それが人間が

生きている意味であり、ここに自由があるのです」

B 「要するにアミダ仏の願いに目覚め、アミダ仏の願いに応じて生きることが人間の生きていく意味なのですね。そのために心のはたらきがあり、そこに人間の自由があるのですね」

A 「ただし、こういう自由があるということは、アミダ仏の撰取不捨の恵みに気づかず、それを無視し、それに逆らって生きることにもなり得ますので、そこに罪が生まれるのです。そのように自由であることは同時に私たちの行いに対して責任があることになります」

B 「では阿弥陀仏においては心の領域はどうなのでしょう」

A 「アミダ仏である寿命無量にも物質面と意識面がありましょう。宗教が直接関わるのは主に意識面の領域であるといえます」

B 「いわゆる仏心の領域なのですね」

A 「量りないのちのアミダ仏における心の領域での

はたらきは、光明無量のはたらきといわれていると思います。この光明を、親鸞聖人は〈智慧のかたち〉といわれます。アミダ仏の智慧が形として現われたのが光明です。光明の内実は智慧です。アミダ仏は無量の智慧のはたらきでもありません」

B 「仏の智慧とは」

A 「智慧とは知る働きですが、単なる知るはたらきではなくて、自他一如・生死一如と覚っている〈智慧〉で、仏智といわれます」

B 「自他一如の智慧とは」

A 「仏の智慧の内容を推し量ることは、とても私の力の及ばぬ事ですが、敢えて申しますと、たとえば私たちは、自己と自己以外いわゆる外の世界とは別のよう意識しています。世界は私にとって他者と大自然ですが、〈自分は他者のみならず自然とも別物、自分と山川・植物なども別物だ〉と思っています。そしてこの私という一個の個物を愛し、自分以外の他者を別物いわずば対立するものと見ていま

す。そして他者の中で自分に都合のよい人を親しい人、自分に都合の悪い人を疎遠な人、嫌な人と見、それ以外の人を関係ない人と見ている。いわば愛憎・好き嫌いで他者を見る、そのようにどこまでも自己愛の思いで見えています。そして自然を自分と別個の単なる物質的な諸物とのみ見ています。こういうのを迷いとい

います。逆に自己と自己以外の物とを一体の如くに見る、他者を見ること自己の如く見る。それが自他一如の智慧です。仏説無量寿經に、

〈衆生を視ること自己の如し〉

とか、妙法蓮華經に、

〈この三界は、皆これ、わが有なり。その中の衆生は、悉くこれわが子なり〉

と説かれています。これが自他一如の仏の智慧といわれるのでしよう」

B 「少し分かりました。では生死一如の智慧とは」

A 「これも難しいですね。これがどういう深い意味をもっているのかということ

はまだ私には十分理解できていません。それゆえ浅い理解しか申し上げられませんが、生まれるということと死ぬこと、生じることと滅することは、一体であり、一つの事象の裏表であって別々のことではないと見る智慧、これが生死一如の智慧ではないのでしょうか。私たちは生を愛し死を憎みませんが、生と死は一体で離れないのですから、一方を愛し一方を憎むのは迷いとい

か言いようはないですね。実は私たちは一瞬一瞬、生死しているのです。一瞬前に滅し一瞬後に生まれている、これがいのちの動いている姿です。どんなものごとも一瞬一瞬生滅の連続です。生まれたということはその裏は死んだということ

です。今の姿が死んだということは同時に次の姿に生まれ変わったことです。いわゆる物事の変化はみなそういう出来事です。量りないのちはそのう風に常に流動しているのです」

B 「私のいのちも一瞬一瞬変化しつづつあるのですね。」

そしてそういう働きは量りなきいのちの働きの外にはない、いわゆる生死ともに阿弥陀仏のいのちの働きののですね」

A 「こうした生滅の現象の変化、流動が可能なのは、そこに力というか、場所というか、それを成り立たしめている大きな働きがあるということなんです。たとえば、大きな海の波は無数に生まれては消え、生まれては消えして変化してはいますが、それが可能なのは大海の水があるからです」

B 「物が生じ、生まれては滅することが可能なのはそれを成り立たしめている大きなはたらきがある、それを寿命無量といわれるのですね」

A 「はかりないのちの展開相として生死は一体一如であり、生死はともに平等です。そういう生死を一如であると覚っている智慧が仏の智慧と言われるのでしよう。アミダ仏は無量の寿命であると共にこの智慧が量りないのを光明無量とい

信心夜話

『二十願のお心』

かせしないから、自分がアミダ仏と離れない身であることが実感されないのです。

念仏の道がある 極重悪人唯称仏」とあるのがそれです。

これを思うに、「我が名を称えよ」のままにお念仏一つ（二十願）になるが、そのお念仏一つのところに仰せられている「ソノママなりを引き受ける」「我が名を称えるばかりでよい」との

【住職雑感】 大地震と飛行機事故、これほど大きな出来事が続いた正月は初めてである。能登地方の地震被害は大きく死者も百人以上になりそうである。珠洲市では家屋の九割ほどが壊れたとも聞く。珠洲市の人口は一二〇〇〇人ほどであり、大谷派の寺院が登録上四三カ寺、輪島市の人口は二三〇〇〇人ほどで、大谷派寺院が登録上八三カ寺もある。能登地方は大谷派寺院がすくぶる多く、しかも過疎化が進んでいる。今度の地震で多くの寺院の建物の再建や修復に莫大な費用がかかると思われる。そうなる

アミダ仏の救いのお心、

しかし、何とか救われたいと願って、経典を読んだり、法話を聞いたり、考えたり、人に尋ねたり、いろいろな善いことや行うなどと励んでいく。しかし、一向にアミダ仏にであうという経験が出来ない。とうとうどうしようもなくなってしまうと、そこにこの本願のお心「我が名を称えよ、必ず助ける」とのお心を聞く。そうすると「分からない、成れない、出来ない」と全く困っている私どもにとつて「そのまま称えるばかりでよい、アミダが引き受ける」というお言葉が有り難くて、ナムアミダブツ、ナムアミダブツとお念仏一つになる。「ただ念仏しかない」となる。

しかし、なお自力の執心は強いので、アミダ仏との生きた出遇いが実現しないのです。こうしてお念仏一つになり、「どうにもならねば我が名を称えよ」で、それが相続していく。困りどうしの人生であるが、そのつどナンマンダブツ、ナンマンダブツと称える一つになる。しかるにまだ自力の執心が強い。

お念仏一つになったのが二十願の念仏と言われ、なお自力の念仏と言われますが、しかし称えているお念仏に大悲がこもっていて、それが遂に自力の計らいを破つてアミダ仏の大悲が我身に流れ込んでくださるのです。第二十願は「果遂の誓い、まことに由あるかな」

が進むのではないかと思われる。しかし都市寺院も問題があり、仏事・法要をする人が近年かなり減少してきている。昔は寺院は地域の中心であり、いろいろな役割を担ってきたが、現代は多くの役割が行政や民間業者が行うようになった。葬儀も葬儀会館で行う人が大半である。こうなると、寺院は一体何のためにあるのかという寺院の存在意義が問われてくる。ただ、真宗寺院の存在意味は明白である。浄土真宗の教えを受け継ぎ伝えて聞く聞法念仏の道場という意義である。そしてそれに付随して亡き人の追弔を通して人と人の交わりを深めるという意義もある。人が孤立化しがちな現代、親族の交わる機会として年回法要の意味もあり、それを通して仏教の教えに触れる機縁ともなるのである。

下さつたのが善導大師です。善導大師は十八願を「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覚」と表して、これが第十八願の中心であると定められ、法然聖人を救う言葉になったのです。この願は「我が名を称えるばかりで助ける、その外に何もいらない」というアミダ仏の誓いであり仰せです。

木村無相さんが六十歳頃、もう外に道無しと感じて、お念仏一つになった時の歌に

「称えてもダメ、聞くことも、信じることも、おまかせすることも、何も出来ない、全くの石ころのような存在である」「まったく助からぬ我である」と知らされる。そこに不思議にも、称えているお念仏の「そんな者だからまるまる引き受ける、助ける」の第十八願の大慈大悲のお心が、はからずも私どものいのちの芯に届いてくださる。不思議なことにお念仏にであうのです。

以上、救いをプロセス的に語りましたが、最初のお念仏の一声のところすでに救いが来ていることはいうまでもありません。

（了）

ただこの救いの言葉が私の上になかなか届かないのは「自力の執心」といって、まだ自分の力をたのみにして、アミダ仏の救いにおま

「道がある 道がある たった一つの道がある ただ

（了）

（了）